

あいの満人が煙草を卸してくれた。その仕事がなくなくなったときは、甘辛ダンゴを作って売りに行ったところ、おもしろいように売れた。材料がすぐになくなり、終わりになり引揚げのくる日まで辛抱した。

いつ帰国できるか不安な情報がとびかう中で、家財道具を売ったり、差し上げたりして、身のまわりの品を少々残した。帰国のときは、一人分は着物冬物、夏物一組と金千円也をそれだけとぎまった。時計、指輪はだめとのことだった。かくして持っていた人は途中で取りあげられた。無蓋車で遼陽行きに乗り、ギューギューづめだった。苦しくともガマンして乗った。

いざ出発、途中いろいろあったが、錦州のほうに行くらしいとのこと、錦州に二泊し、コロ島に一週間ぐらいうぶに過ごせた。大ぜいの中には、わが子の病気のために子どもを満人に預けた人や、わずかな金で売った人、お願した人、いろいろな人生の縮図のような気がした。とても現在では考えられないようなさしせまった状況は、想像を絶するものがあった。

私達は、「これが祖国日本だ、ふるさとだよ」……涙が

とめどなく流れ、感激しあい、ぶじだったとこでほっとした。上陸したらDDTを頭よりかけられ、みんな白い頭になったが、嬉しくもなんともなかった。あさり入りのおにぎりを頂いた。そのおいしかったことは忘れられない思いでになった。列車に乗って郷里へ向かった。内地の列車が小さく感じた。上野に着き、白光りのするおにぎりを頂き、もったいなくて食べずにいたが、お腹がすいたので拜んで食べた。帰国後は農業の手伝いをし、生活の再建を計った。

もう四十五年以上の前のこと、お世話になった満人（張、陳、李）にお礼を言いたい。

## 銃に立ちほだかった母の愛

東京都 齋藤 桂子

玄関のドアが荒々しく開けられて、八路軍の兵隊が二人、銃を手にはいってきた。

父は不在中で、母と知恵遅れの兄と、私の背におぶっ

た末弟の四人だけだった。兵隊が中国語で何か叫ぶと、突然兄が恐怖心からか大声をあげた。言葉が通じないために、兄の状態のわからないその兵隊は、いきなり兄に銃をむけた。反抗すると思ったのか……。私はハッと息の止まる思いで母の顔を見た。

そのときだった。母がいきなり兄の真ん前に立ちふさがり、両手をひろげ「小孩（しゃおはい）、脑袋有病（な おたいゆうーびん）」というと、まだ怒って銃口をむけつづけている兵隊に、自分の胸をさして「私を撃て！」と言った。その母の姿には命を捨ててわが子を守ろうとする必死の祈りが、まるで観音様か慈悲の菩薩の姿に見える、私もまた母を救わねばいけないと、夢中で兵隊の銃にとびつこうとした瞬間、予想せぬできごとがおこったのだ。

それまで憎しみの目で、母の背にかくれた兄を狙っていた兵隊が、突然銃をガタンと板の間に投げると、何か中国語で口早に行っけしきりに手をふっている。そのとき、玄関のドアが開いて、上官らしいマントを羽織った兵隊かはいってくるなり、その二人の兵隊を制し、外へ

出させると、母に向かったとどたどしい日本語で、「おくさん、すみません。ごめんなさい」と言うと、手をふりながら出ていった。

母はとたんにその場へくずれ落ちるように膝をつくと、兄を抱きしめて泣いた。私も弟を背負ったまま母にすがりついて泣いた。母の愛が、異国の人の心に通じたのだ。

昭和二十年終戦の年の冬のことである。

満州鞍山市の満州製鉄社宅でのこの光景は、今なお私の眼裏（まなうら）に焼きついてはなれない。その直後、李さんという八路軍の将校が突然私共の家にきて、父母に「私うおぼえていますか。会社で労働していたとき、いつもあたたかく目をかけてくれましたね。生活の苦しい僕のこと知ってて、この家へよんで旦那さんが作る野菜畑の雑草取りさせてくれて、たくさんのお金くれましたね。太太（たいたい）（奥さん）はいつもあついで豚頭頭作って私にくれた。私恩返しします。この家の二階貸してください。私が住みます。そしてもうせつたい兵隊ども一歩も入れさせません。」という、どんだん荷物を運

んできてほんとうに以後は、李さんのいったとおりに  
なった。

父は満州製鉄で部長をしていたが、満州人を大事に  
し、母も私達子どもに差別してはいけないと教えてくれ  
ていた。

父のいろいろな善行や、誠実な人柄がソ連軍が進駐し  
てきたときも、司令部で調べられたが、すぐ釈放され、  
二十一年八月には、一般市民の方達とともに、危難多き  
引揚げではあったが、ともかく家族揃ってコロ島から海  
防艦で博多へ着き、ぶじ一か月後には父の郷里水戸へ引  
揚げることができた。両親とも、あいついで亡くなっ  
たが、私達子どもは四人健在でいます。